

為替ヘッジをするか、しないか？ ～先進国債券の投資手法を考える～

先進国債券(除く日本)のパフォーマンスを長期で見ると、為替の影響を含んでいない「現地通貨ベース」(債券自体のパフォーマンス)は比較的安定しており、リスク(変動率)も相対的に低水準となっています。しかし、円ベースで投資する日本の投資家にとって、為替の影響は避けて通れない問題で、為替ヘッジをするか、しないかは悩ましい選択となります。

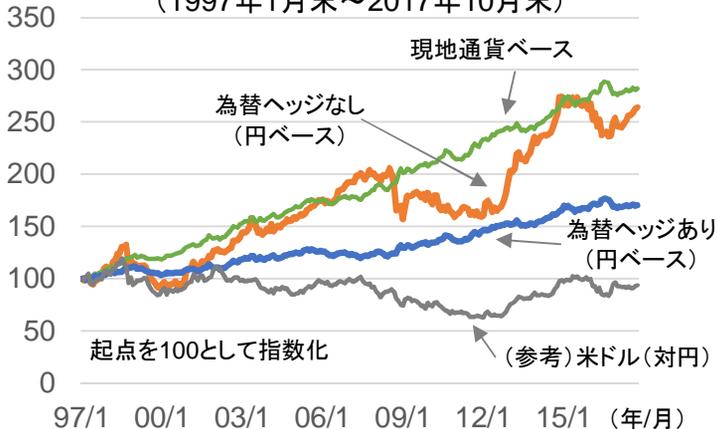
「為替ヘッジなし(円ベース)」は、為替の影響を受けてリスクが大きくなる傾向にあるものの、長期では現地通貨ベースと同等のリターンになっています(下記、右図参照)。一方、「為替ヘッジあり(円ベース)」は、為替の影響を為替ヘッジによって抑制していることから、リスクは比較的低いものの、為替ヘッジコストが発生するため、長期のリターンは現地通貨ベースに比べて低くなっています。このように、為替変動とヘッジコストが先進国債券の円ベースのリスク・リターンに影響を及ぼしていることが分かります。

そこで、ひとつの解決策として、為替ヘッジなしと為替ヘッジありを組み合わせる方法があります。過去(約20年間)のデータで見ると、為替ヘッジなしを20%程度、為替ヘッジありを80%程度で組み合わせると、為替変動リスクが抑制されてリスク・リターン比率が向上する傾向にありました。そのほか、為替ヘッジなしのリターンは長期的には現地通貨ベースに近い水準が期待される一方、短期の価格変動が比較的大きいことから、積立投資などで購入単価を均す方法もあります。

足元の金利環境をみると、米国では緩やかな利上げが続いているほか、カナダや英国は今年、利上げに転じ、ユーロ圏は量的緩和の出口戦略を模索しています。一方、日本では物価の鈍い動きなどから、量的緩和がしばらく続くとみられています。こうした海外の金利上昇圧力の高まりは、先進国債券(債券価格)にとっては、向かい風となる可能性があるものの、為替(対円での米ドルやユーロなど)については、内外金利差拡大から追い風(円安・各国通貨高)になるとみられます。そのため、各国の金融政策の方向性を考慮して、長期投資を前提に為替ヘッジなしという選択肢もあります。こうしたことから、投資家のリスク許容度に応じて、為替ヘッジや積立投資などを組み合わせることで長期で投資することによって、先進国債券投資のパフォーマンス向上につながると期待されます。

先進国債券のパフォーマンスの推移

(1997年1月末～2017年10月末)

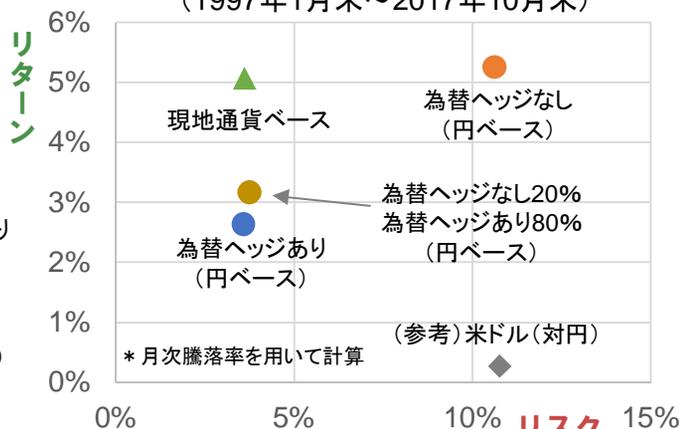


(信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成)

※上記は過去のものであり、将来の運用成果等を約束するものではありません。

先進国債券のリスク・リターン

(1997年1月末～2017年10月末)



※先進国債券:シティ世界国債インデックス(除く日本)